

ると言ってくれました。私はノルマでの課せられた過酷な労働から解放されて収容所長のボーイとして働くことができました。馬方をやったおかげでした。これから復員するまで抑留者としては恵まれた抑留生活をしてきました。

苦しかった抑留生活の話をしてきましたが、この抑留生活をしなければならなかったのは戦争をやったからです。苦しい生活をしたが、日本国に帰ることができました。日本国に帰ることができず、未だシベリアの凍土の中に「飯を食べさせてくれ」と叫びながら眠っておられる戦友が数多くおられます。どうか二度と再び戦争を起こすことなく、この平和の生活ができる世の中を続けるようにしましょう。

## 私の抑留生活

愛知県 加藤 一郎

私は昭和二十（一九四五）年九月中旬、満州の奉天（瀋陽）で抑留され、九月二十七日に奉天を出発、約一カ月をかけて黒河に到着し、国境となっているアムール川を渡ってソ連に入り、バイカル湖近くのブリヤートモンゴル自治共和国のノボシビルスクというシベリヤ鉄道沿線の駅に着いたのが十一月八日で、奉天を出発してから四十日以上列車生活をしてやっと目的地に到着しました。

到着した昭和二十年十一月から昭和二十三年六月まで伐採を中心とする作業に従事し、「ダモイ」ということで昭和二十三年六月ナホトカまで来ました。何が何の因果か、ここでさらに一年三カ月の港湾工事に従事し、昭和二十四年九月二十一日ナホトカ港を出港し、同二十四日無事舞鶴に上陸、防

疫その他の手続を完了し、二十八日にやっと我が家に帰り着くことができました。奉天を出発してから丸四年と一日でした。

ノボシビルスクの収容所は丸太を組み重ねて造った建物で、日本では最近小さなものを見掛けますが、建物の内部は二段式の「蚕棚」のようになっています。その棚の上には、寝台用のマットと云うようなものは何もありませんので、床板の上で直接毛布を敷いて、着の身着のまま寝るので、到着したのが十一月八日ですからシベリヤは既に氷点下の日常です。驚いたことには私達が予想していたような暖房設備ペーチカとは、ほんの名ばかりの暖炉のようなものがあるだけで、夜は当然のことながら氷点下何十度になりますので、頭の中から足の先まで着たまの姿です。もちろん、靴をはいたままでした。

私が最初に従事したのは、松の枕木製造工場で枕木の製材でした。ここにはタマーラという中年女性の監督がいましたが、ソ満国境の戦闘で息子

が戦死したと聞いて、我々を敵のように追い立てるのですが、ただ働け働けで、機械の調整をしたり、丸鋸の目立をする等の作業効率をあげることが全く考えないで追い立てるばかりで、作業成績があがらないものですから、ついには工場の柱時計を逆回しをして、時間延ばしをしてはソ連の歩哨と連日けんかをするような始末でした。

私は作業態度が悪いと判断されたのか、ほんの僅かな勤務で同じ工場内で枕木の皮むき作業に回されました。三メートルの生木の枕木の皮をむくのですが、皮をむいたものは井の字に積み上げて、枕木の数の確認が容易で、かつ荷くずれがないように積みあげるので、これもノルマがあり、十分な食事をとっていないものですから体力があらうはずもなく、大きな防寒手袋をしての作業ですから、なおさら力が入らず、枕木で手を挟まれたり、足の上に落ちたりで三回怪我をしましたが、内科の疾患ではなかなか休みが取れませんが、外傷は無条件で休むことができ、ソ連に入って最

も苦しかったこの時期に怪我のお陰で生き延びることができたと思っています。

このころ、満州から持って来た大豆ばかりを毎日食べさせられたことがありました。全員が胃腸をこわして下痢で、作業するより便所に行くのが忙しいような時がありました。そのような時に突然に貨車が入って来まして、積荷の煉瓦の積みかえ作業をしたことがありました。煉瓦をたった一枚担いでいるだけですが、レールを越えるのがヤットというような状態で、監視の歩哨が急げげとやかましく言いましたが、身体がどうにもならず、大変苦しい作業でしたが、これが影響してか食事に大豆があがらなくなりました。

先に申しましたように、シベリヤに入る前の列車輸送中にも、ソ連側からの食料の給与はなく、列車が駅に停車した時に寄って来る中国人が持っている食料と品物と交換したり、駅構内にある倉庫から食べられる物があればカップラったりして食事をしていましたので、ろくな物は食べており

ませんから満州領内で既に、胃腸障害になっていたのです。そしてソ連に入ってから、先に申しました大豆、青小豆、粟、トウモロコシ、高粱等が主食で、トウモロコシや粟のお粥のようなものが飯盒の蓋一杯で、朝食とというような状態でしたから、当然満腹感はありません。そこで私達の作業隊ではスルメと称して、松の甘皮を食べたり、松の葉をビンに入れ、発酵させたものを飲んだり、いろいろな知恵を尽くしていましたが、元気で力いっぱい仕事をする人達ほど、影響が大きく、酷寒の中での重労働ですから体力の消耗もひどく、栄養失調、胃腸障害で多くの若者が亡くなったのです。

シベリヤの寒さについて申し上げますと、大体真冬は零下五〇度くらいまで下ります。九月には雪が降り、日本の旧正月のころが最も寒く、アラルコルハという所では毎日零下五〇度以下でした。気温が零下三〇度以上に上るまで待機し、零下三〇度を越えるのを待って作業に出ましたので、毎

日が半日作業でした。大変助かりましたが、冬はすべての物が凍っています。松の木も芯まで凍っていますし、松を伐る時には、枝の張り方を見たり、倒してから木を刻む段取りを考えたりして倒す方向を決めるのですが、木が凍っていますから切口を平に切らないと木が倒れる時に株が滑ったり、舞ったりして思わぬ怪我をすることがあります。私も倒した木の先が計画よりずれて、隣の木に寄りかかって倒れたものですから、倒した木の枯枝が跳ね返って私の額に当り、六針縫う怪我をしました。この時は大変な出血でソ連の軍医もさすがに心配してくれましたが、縫った方は良くなくても眼の周りの血ぐまが消えないで、怪談に出てくるお岩のような顔をしていましたので、大変長い間休みました。

また凍付いた様子を申し上げますと、ソ連人の穴掘りの一日のノルマが一立方メートルですが、コンクリートのように凍った土はなかなか掘れません。

日本人は穴を掘る所で半日ぐらい火を焚いて、土を暖めてから掘りますと比較的容易に掘ることができますが、大体地下二メートルまで凍っていますので、冬の穴掘りは大変な作業でした。

このような酷寒の地で食事を十分に与えられないで重労働を強いられるのですから、死亡者も多く、私がいきましたウラン・ウデ地区では、昭和二十年十月から昭和二十三年六月ごろまでの約三年間に九百四十人が死亡したことをソ連の報告書で確認いたしますが、ソ連に入りました昭和二十年十月から昭和二十一年六月までの九カ月間に六百八十七人、初めての冬に全体の七四%が命を落しているわけです。この日本人の死亡率はドイツ人の捕虜の死亡率の二倍とソ連側でも報告しております。

経験したことのない寒さの中、十分な食事を与えられず重労働で酷使され、なお十分な医療手当を受けられず、その結果と言わざるを得ません。昭和二十年十二月から翌年三月までの厳寒期の死

亡者は四百四十五人に及び全体の四七%にもなり、先程申し上げたような状況で、本当にキチツと埋葬されたか疑問に思う次第です。

私は怪我が重なって幸に生きて帰ることができましたが、ウラン・ウデの病院で家族のことを心配し、兄弟のことを思い、生きて帰りたい一心で、配給になった黒パンを握りしめながら、胃腸障害や栄養失調で亡くなった戦友の話の聞くにつけても、誠に感慨無量のものがあります。

このような悲劇を私達の子や孫に経験させることのないよう努力しなければならぬと誓い、皆様にもお願い申し上げる次第であります。

## シベリア抑留記

滋賀県 角田 武雄

滋賀県米原市中多良に生れる。

大正九（一九二〇）年六月八日生れ。昭和九（一九三四）年三月米原尋常高等小学校を卒業。昭和十年十二月に国鉄大垣駅に就職。家業の百姓は父母と姉妹で行う。昭和十六年九月に東部一〇三部隊に徴兵で入隊、六カ月の教育を経て、満州九六部隊に転属のため、昭和十七年二月満州寧安に到着。以降、満州国内各地通信所に勤務。

昭和二十年八月九日「ソ連」侵攻で、急遽寧安を連隊本部と共に脱出。事前に準備は出来ていなかった故、少々の機械で情報を取りながら南下。新京（長春）に立ち寄るが、もぬけの空で、再度列車に乗り南下。安東の手前で下車。徒歩にて安東に向い、安東にて武装解除される。九月の初めごろまで滞在するが、別に「ソ連」軍が監視する